

日本古建築研究之葉 (第二回)

工學博士 天 沼 俊

緒 言

私は明治三十九年七月に初めて古社寺建築に密接な關係を有する事になり、目下も尙ほ研究中であるから到底彙なんか書く資格はないので、再度辭退をしたがお許しがない、止むを得ず私が初めて日本建築に關係した以來、今日に到る迄の經驗に基いて記載する事にした。

多少此方面に興味を持った人からよく尋ねられるのは、日本建築の研究には何といふ書物がいゝかといふ事であるが、たゞ參考にするつもりか、若くは豫備智識を得るつもり位の考へで讀めば讀

むものゝ、實地研究をしなければ本計りいくら讀んでも駄目である。併し其參考に讀む本の名を書いて見ると

- (一) 稿本日本帝國美術略史
- (二) 特別保護建造物及國寶帖解説

(一)は參四拾圓位する本だが縮刷も出來て居り夫れなら安價で買へると思ふ。(二)は先年内務省から日英博覽會に出品したもので、解説は古社寺保存會委員たりし斯道第一流の大家が分擔執筆されたもので、豊富なる寫眞及び圖面と相俟つて、最も完全であるが頗る高價である。此れは各中等學校以上

の學校や方々の圖書館には多分備へつけてあらう。

(三) 日本美術史講話 黒田鵬心著

黒田文學士の著で小さい薄い本だが大體の輪廓丈けは分る、初めて研究するには先づ此の本でも見て、夫れから先に記した二つを見たらいゝだらう外には同氏著の「奈良と京都」「日光と平泉」にも多少出て居る、雜誌「歴史と地理」には佐々木文學士の「日本建築史講話」が連載されて居る。外國人の書いた本にも一寸は載つて居るが夫れは讀むには及ばないと思ふ。

(四) 特別保護建造物綜覽 木村貞吉編

保護建築を各府縣ごとに時代別に列記したもので附録に日本建築史の概略を載せてあるから、初學者には最も便利であると同時に、實地踏査者にも必要である、五寸に三寸のポケット入で携帯至便。

研究に際し注意事項

建物の研究をするには時代の區分及び様式手法の變遷を極むる事が必要である。時代は大きく分けると佛教渡來前と渡來後の二つになつてしまふ、即ち日本固有の建築——といつても古い時代であるから勿論大したものではない——と、佛教の影響を受けた建築との二つである。

佛教渡來前の建築では其中心になるのは神社と宮室とであるが、双方の間に大差はなかつたので今日我々が出雲の大社・和泉の大鳥神社・攝津の住吉神社に於て見る様式の建築である、其元は古來工匠間に傳へられて居る天地根元宮といふ形が先づ原始的建築の大體を髣髴せしめるのである、尤も高橋健自氏は雜誌「歴史と地理」第三卷第二號に於て、埴輪の殘闕より精細なる研究を遂げて「遺物上より見たる古代の住居」といふ論文を發表して大に建築家の蒙を啓かれたが、私としては尙ほ

教へを乞ひ度い點もある、併し何れにしても圖面又は模型のみで實物はないのであるから、教へを乞ふのは他日を期し此處には總て省略し、佛教渡來後の建築に就て記さう。

佛教渡來後といつたところで、欽明天皇十三年から今日迄を含むのであるから、餘に長過ぎて其間幾多の變遷を経て追々複雑になつた工合が判りにくい、そこで便宜上次の八時代に分ける。

一、飛鳥時代。佛教渡來より大化改新頃迄

二、奈良時代。

前期 大化改新より奈良遷都頃迄

後期 奈良遷都より平安遷都迄

三、平安時代。

前期 平安遷都より仁和寛平頃迄

後期 仁和寛平頃より平氏滅亡迄

四、鎌倉時代。平氏滅亡より南北朝合同迄

(北條氏滅亡迄までしたのもある。)

五、室町時代。南北朝合同より足利氏滅亡迄

(建武中興から室町時代に入れたのもある。)

六、桃山時代。足利氏滅亡より豊臣氏滅亡迄

七、江戸時代。徳川氏時代

八、明治時代。明治維新より現今迄

斯様に時代の區分をして見たところで、一時代の終りと次時代の初めの建築は殆んど差がなく、又同一時代でも初めと終りとは大差がある。であるから細かく分けることもつと澤山になるのは勿論である。

夫れから例へば一つの建築があつて、其建築が鎌倉時代に屬するといつても建物全體をつくり其時代のものは一つもないと言つてもいい、位、即ち修繕の度毎に多少新材料を補加して居る、材料丈けならいゝが手法迄其時々を用ひてあるから、二度も三度も修理を経たのになると中々分りにくい。京都附近で一二の例を挙げると、大原の三千

院本堂は外観は到底平安時代後期に入れる事は出来ない、正しく江戸時代のものである。船井郡高原村大福光寺本堂は屋根の勾配を急にして葺きにしてしまつた爲めに遠望は大きな農家のやうに見える、當初からあの様な屋根だつたと思ふと大間違ひである。甚だしいのになると瓦葺二軒フタノキであつたものを飛檐檼を除き一軒ヒトノキとし、屋根の形を變へてしまつたのもある、修繕前の大和五條榮山寺八角圓堂の如きは即ち此好例である。平安時代前期唯一現存の堂として知られたる大和の室生寺金堂は、今は四注で正面に深さ一間の外陣を附加した爲め其部分は兩側面に「縦る破風」がついて居るが創立當時は五間四面の入母屋造であつた。鎌倉時代末期の建築たる京都府愛宕郡花背村の峰定寺本堂も、今は同じく四注であるが元は入母屋であつたのである。故に建造物を觀る時は餘程注意して創立當時の部分と後世修補の部分とを見分る事が

最も必要で、此の目的を達する爲めには場合に由り天井裏や床下迄で調査しなければならぬ。此の見分けを誤ると推定が大に間違つて何もならぬ事になる、夫れには細部例へば斗・肘木・繪様・線形等の細心の研究が第一の必要事項である。

夫れで時代の推移に伴ふ様式手法の變遷が分ると、建造物を觀た時に其建物がつ頃創立され、いつ頃どの部分に修繕を加へたものだといふ事が自然に判つて來る、斯様な修繕になると一々記録に止めてないものもあるし、又記録はあつても誤つて居たり或は故意にいゝ加減な記し方をしてあるかも知れないから、斯様な場合には實物から誤りを見出さなければならぬ、要するに記録實物兩方からの研究が必要で、兩方が一致すれば申分なし、若し相違した場合には冷靜なる態度で判斷すべきは勿論で、一方に偏するのは甚だよろしくないのである。

一例を擧げると、京都市紫野の大徳寺三門は大永六年創建當時は單層であつたが、後に利休が檀越となつて天正十七年に上重を造り、内部に長谷川等伯が繪を描いたといふ記録が寺にあるさうである。私は此の記録は未だ見ないが、最初は單層であつたが後に閣を造つたといふ事は「山城名勝誌」「山州名跡誌」等に出て居る、現に三門の棟札も天正十七年のがあるし、上層の大虹梁の下端にも等伯の名が大書してあるから、右記録の後半は確かに事實である。併し實地に就てよく調査して見ると、上下層共細部の手法例へば肘木・斗・木鼻等の形は全く同一で、あとから如何に巧に模造してもあれ迄によく眞似をする事は不可能である。のみならず上層側柱内部には大分剝落しては居るが當初の繪がまた朦朧と残つて居る。次に私は寡聞で未だ單層の三門を知らないが、假に有つたとすると、單層の場合には構造等も夫れに叶ふ様に

出來て居る筈だから、其上にあれ丈け大きな上層を乗せたとしたら、下層は重量に堪へまいし、又漸くたへたとしても大分危険で少し大風でも吹くとフラ／＼するであらう。恰好から考へても上層が出來たら非常に醜いものになるべきである。然るに實物は少しも左様の事なく現在の儘で立派に形はとれて居り、全體としても甚だ安定であつて室町時代の様式を充分に發揮して居る。尙ほ外にも記録を否定する動かすべからざる證據はあるが餘り専門に渡り過るから省略するとして、さういふ都合で記録の前半は間違ひである。此一例で見ても實物研究の必要な事が分るのである。

終りに一寸記して置く。或る建物をいつの時代であるといふのは其様式がさうであるといふ意味なので、例へば平安時代に建てられたものが平安時代の様式なのは當り前だが、鎌倉時代になつて或は萬一一つ前の様式に據つて建てたかも知れな

い——今後は知らず今迄は左様な事は先づあり得ない——として、今になつて見ると記録のない以上、真正の建立年代は確言は出来ない、そこで實際は其建物が鎌倉時代に出来たにもせよ様式から平安時代に入れべきである。以下私が何時代といふのは其時代の様式のものといふ事にしておくから、其つもりで讀まれ度い。

序にも一つ。建物といへば宮殿・住宅・神社・佛寺等所有ものを含んで居るが、古い所では佛寺建築が残つて居る斗りで神社の方はさう古いのはない、現に前者は飛鳥時代迄溯る事が出来るが、後者には漸く平安時代後期迄である、宮殿住宅は皆新しいもの斗り、故に以下重に佛寺建築に就て様式手法の研究を試みる事にする。

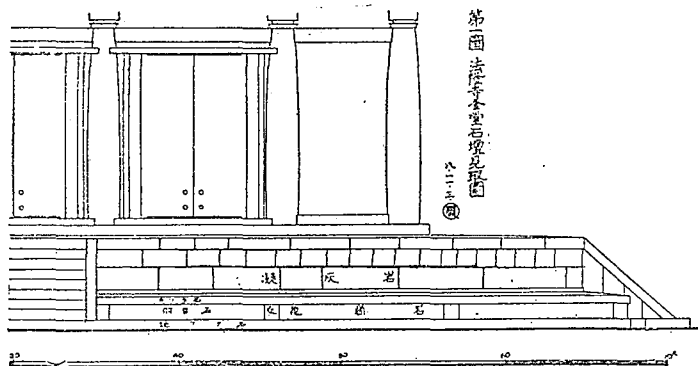
第一 石 壇

建造物は大概壇上に建つて居る、即ち平地に石を積んで高くしてある、石の積み方にも几帳面に

四角に積んだのと、自然石又は粗い作を加へた石を積んだのとあるが、細別すると前者に二種ある

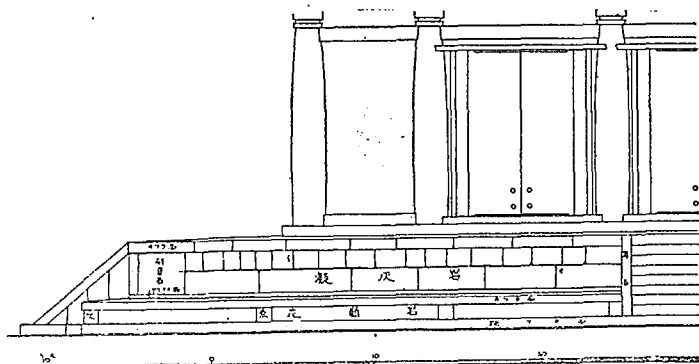
其二種は法隆寺金堂及び五重塔の石壇に於て見る事が出来る、第一

圖は法隆寺金堂の石壇を正面から見たもので、二重壇の上壇は古く下壇は後の修補である、當初は二重共上壇の様な形であつたと思は\*



\*るれが、凝灰岩なので破損し易い、現に上壇の羽目石の若干は表面から分解し碎けて粉になつて落ちつゝある、下壇は上壇より面積も大きく地に接して居るので風化作用の爲め破壊してしまつたから、花崗岩で補つてある、併し其手法は異り下壇には若干の等間隔に束石が入れてあるが、兎に角二重の壇の現存して居るのは法隆寺の金堂と五重塔の壇丈けであるから、遺物からでは飛鳥時代に限るとしておいて差支へない。と言つても飛鳥時代ののは二重の石壇に限るといふのではないので、一重のは立派に残つて居る、即ち法隆寺西院歩廊のが夫れで、葛石こそ亡くなつたが、羽目石と地覆石とを一石から刻み出したのを十個斗り西側歩廊の西北隅から発見した、東側歩廊の外側(即ち東側)には壇の羽目石が大分地上に露出して居る、未だ發掘して見ないから分らないが、多分右に記したのと同様のものであらう、此等は創建後一千三百

年間に自然北方より流れて來た土砂の爲めに地中に埋没して了つたのであるが、此等を見ても一重の石壇の在つた事は確かである。法輪寺や法起寺の建物も壇全部をやり直してあるから、現在は一重だか當初からさうであつたと遽に斷言する事は出來ない。



次の奈良時代になると右に記した下壇の様式の

一重壇の上に建つ様になる、尤も奈良時代前期の建築としては、大和西の京の薬師寺に東塔が一基残つて居る丈で、壇は矢張花崗岩の壇上積になつて居るが、石は當初のものでないから當初の様式に就て想像はし得るが確言は出来ない、併し和銅の築造に係る奈良興福寺金堂の夫れは正に一重の壇上積で石は花崗岩を用ひてある。後期のものでは唐招提寺金堂・講堂等で見ると確かに一重の壇上積であるし、其他にも相當に實例があるから、先づ奈良時代前期以後は二重の壇はなくなつて皆一重になつたと思はれる。夫れから後になると石垣の様に積んだのや自然石を任意に積んだの等がある、此の亂積は古雅で反て面白い、室生寺の五重塔も修繕前は——當初からさうだつたかどうか分らないが——此式であつた、今の規則正しい壇上積よりよく調和が取れて居たと思ふ、以上

記した石壇の様式を一つ書きにして見ると

壇上積

(一) 地覆石・葛石及び任意の大きさの羽目石より成り束石なし。

(二) 地覆石・葛石の間に等間隔に束石を置き、束

の間は略ぼ巾の一定せる羽目石より成るもの。

石垣積

(三) 方形又は多角形(多くは六角形)の石にて積みたるもの。

亂積

(四) 自然石を以て隨意に積みたるもの。

先づ此位で、(一)は最古(二)は此れに亞ぎ、(三)(四)はさう古くはない。今日残存の實例からいふと、(一)は飛鳥時代に限り、(二)は飛鳥時代以降現今迄、(三)及び(四)は平安時代以降である。

壇上は石を敷くか又は漆喰の叩きだが、古い時



代のは大概は石を敷く、其敷様も今の様に「四半」

(方形の石の對角線を壇の一邊に平行せしめたもの)ではなく、巾は大概各通り一

定して居るが長さはいろ／＼のものを壇の一邊に平行即「布」に敷いたのである、法隆寺金堂や塔や

東院夢殿の壇上等は勝手氣儘の石を敷いてある。

飛鳥奈良時代を通じて大和附近で石壇又は礎石

に用ひられた石は殆んど總て一種の凝灰岩であつ

た、此の岩は大和河内の境にある二上山附近から

出るので、外に私は未だ産地を知らない。奈良の

春日山から「春日砥」と稱する石が出るが此れは異

ふ。名稱は俚俗「穴虫石」といふ、類似品は大和國

北葛城郡二上村の「十條坊」・「シルタニ」・「ドンジ

リボウ」・「石切尾」等からも出る。先年當麻寺西塔

修繕の時壇上の敷石に用ひたのは「石切尾」から採

取したものであつた。今でも「穴虫石」といつて石

燈等を製作する爲めに切り出して居るのは矢張

「石切尾」からである。併し昔し用ひたやうなのは

二上村穴虫小字西垣内ニシカイトから田尻を經河内の國分に  
通ずる道を十町斗り進んだところから左に折れ、

河内の春日に通ずる道を大和河内の國境を越えて  
五町程行くと右側に小池がある、更に四町程で今

度は左側に又小池がある、其兩池の間の道の兩側

(第二圖參照、圖中黒點を附せるが産地)から出るが、到底大きいものは

採れない、壇に用ゆる位の大きさのを切り出さうと

すると皆缺けて了ふ。今ま俚俗「鹿谷寺址」と稱す

る所は往昔の凝灰岩採取所であつたので、此所の

は各所の堂塔の石壇礎石又は古墳の石棺等に用ひ

てあるのと同質であるが、採り盡してもう今は切

り出せない、あの十三重の石塔は石工が石を切り

出す時塔の形に残したのであらう、だから形も大

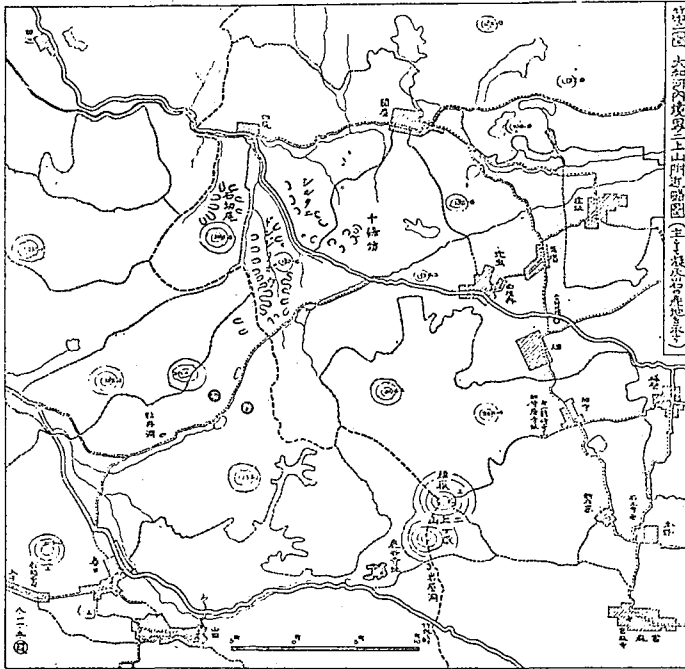
分に變だし塔も生へ抜きである。此石は質が脆弱

で工作し易いから道具の不完全な時代に多く用ひ

られた。曩に屢々記した法隆寺金堂や塔の石壇の

羽目石には鑿で削つた跡が明らかに残つて居る。

平安時代に入つても尚ほ用ひられた、超昇寺(奈良  
縣生駒郡伏見村大)の礎石は即ち此であつた。法隆寺上御  
宇佐紀(廢)



法隆寺上御宇佐紀(廢)の礎石(奈良縣生駒郡伏見村大)

堂の夫れにも用ひられてある。故に遺跡からいふ  
と此種の凝灰岩は飛鳥奈良及び平安時代前期迄用  
ひられたのである。

石壇に登る爲めの石階も勿論當初は此種の  
石を用ひたのであらうが、雨風に曝されてる  
のと昇降に踏みつける爲めか、古いのは一つ  
も残つて居ない。私知つて居る唯一の例は  
奈良東大寺廢東塔院塔婆の耳石で、これは今  
はよく見える様になつて居るが段石は一つも無  
い。實例がないから斷言は出来ないが石階も  
同質の石であつたらうといふのは決して不合  
理な想像ではない。

### 第二礎 石

礎石平面の形は全く任意で三角四角勝手次  
第、全體としても同様で甚だしいのになると  
下端が尖つて居て、恰も方錐体を顛倒した様  
なのがある。地形は叮嚀なので小さな石木端イシコツバ

又は玉石・栗石等をかひ物にしてある位、大概のは地面を突き固めて其上に礎を据ゑた。礎は柱の太さに比して非常に大きく建物は木造だから比較的軽いので荷重の爲めに建物に歪を來す程沈下した例は澤山はない。東大寺大佛殿の如き大建築でも矢張斯様に簡單な地形外してない。

石の種類は古くは凝灰岩又は花崗岩であるが、残つて居るのに據ると花崗岩の方が遙に多い、凝灰岩は作を施すに都合がいゝが石の性質上大して厚いものは昔しても採れなかつたから、荷重の爲めに破れる場合が多いからであらう。凝灰岩が直ぐそばに澤山あるにも係らず安山岩を礎に用ひた場合(奈良縣北葛城郡當麻村大字加守、加守)もある、此れは(廢寺址にある礎は即此。第二圖參照。)全く礎石に不適當だからである。曩に記した法隆寺上御堂や廢超昇寺の夫れは寧ろ除外例であつて法隆寺の中門・金堂・塔を初め飛鳥奈良時代に創建された寺の礎は大概花崗岩である。鎌倉時代頃に

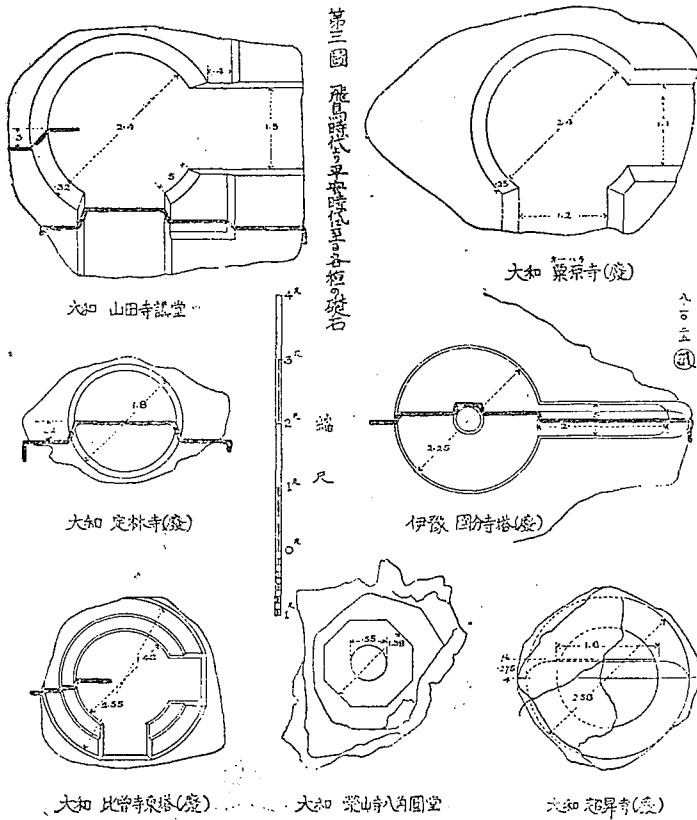
なると硬質の自然石——讚岐石の如き——を用ひたのもある、此れは川床等に轉がつて居るのを拾つて來て、何等の工作を加へず其儘そつくり礎石にしたのである。

様式は飛鳥時代の初めから奈良時代迄は上端丈けを平たくし其上に柱を建て、ある、故に建物があつてこそ中心は分るが、建物が亡くなつて礎斗り残つて居る場合には、ごこが中心だか甚だ不明瞭である、法隆寺中門の礎は此種の好例である。

飛鳥の末から奈良平安へかけては、石の上端から柱の直徑より少し大きく柱の形に應じて圓形・方形又は八角形の繰り出しを作る。此繰り出しは普通一重だが、二重又は三重のもあり、其中央に小突起を作つてあるのもある(第三圖)、此の突起は柱の下部を豫めほり回めておき、其回みが石の上の小突起にかぶさるのである。此の小突起の出來たのは遺物から稽へると奈良時代後期以降と思はれ

る。時には礎石上端圓形の繰り出しと同じ高さに「狭石」をも繰り出したのがある。第三圖に各種の

礎石七種を示してあるから詳細は此圖に就て見られ度い。第四圖には奈良時代前期の層塔の中心柱

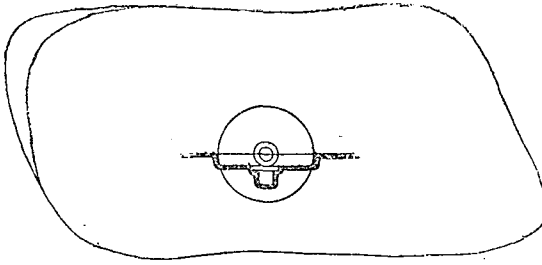


の礎五種がある、其最も簡單なのは中心に心柱の根が入る様に若干の深さに孔を穿つたのみだが、手の込んだのになると三重にだん／＼小さく鑿り凹め、其底に三つ竝べに圓孔をあけてある。大窪寺・比叡寺・石光寺の、様な場合には、一番底の小さい孔には舍利等を納めたので、舍利は必ずしも心柱の頂上に置くこと限り限つたものではない、其證は淨土寺(後の山田寺。奈良縣磯)の塔に於ては舍利を礎石中に納めたのを見ても分る(「法王帝説」參照)

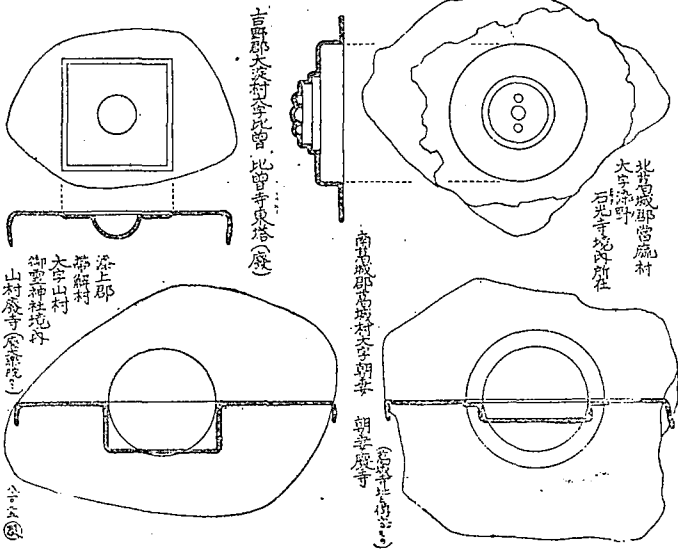
平安時代は先づ前期の繼承で

第四圖 大和松島塔婆心柱礎石

高市郡高野村宇天久保  
殿文隆寺?



縮尺



\*のである。

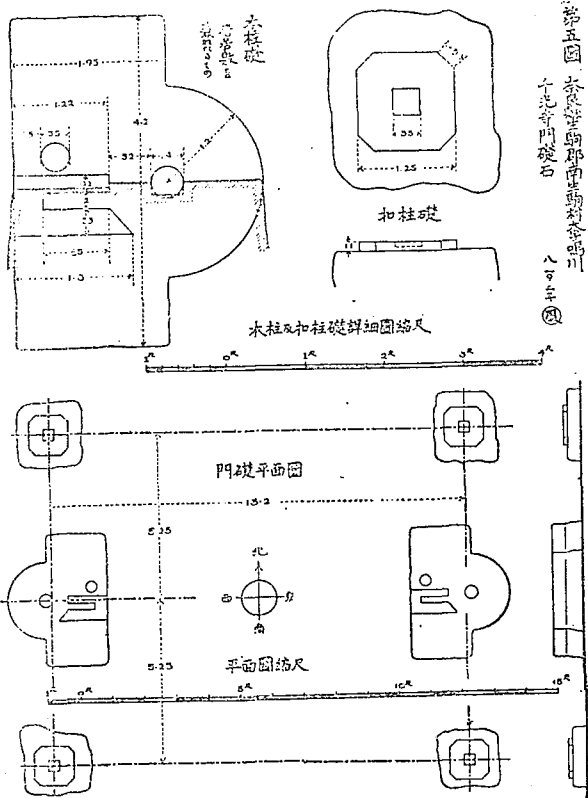
鎌倉時代になると此外に二種類の新しい形が出来た。其一は既に一寸記したが硬質の自然石其儘を用ゆる、だから上端は平坦とは限らない寧ろ凹凸があるのが通例で、此場合には柱の下端を石の上端の形にとつて馴染をよくする、大變手間がかかるのみならず結果も餘り面白くない。其二は大面取の立方體(又は截頭(方錐體))の繰出を附けるか又は斯様な形に作つたもので、此の形は大

自然石もあれば圓形に繰り出したものもある。社殿等の小さい軽い建物では極めて簡単な石を用ひた\*

面取の方柱に適應せしめたのである、尤も大面取の方柱は平安時代後期に既にあるが(宇治平等院の中(堂の柱は一例))

其礎は自然石である。第五圖は千光寺(奈良縣生駒郡南生駒村大字)四脚門の礎の實測圖であるが、此は今礎石丈

い。此等の形の礎は鎌倉以前にはないとしても以後には在り得るから、鎌倉時代のものと斷言出来るかどうか問題だが、礎の大きさから其上にあつた建物の木割を考へて見ると、各材料は可なり太かつた事が想像される。室町時代になると木割が大分



第五圖 奈良縣生駒郡南生駒村千光寺  
四脚門礎石

八〇五〇

け完全に残つて居り建物は全然ない、併し礎の様式から鎌倉時代に築かれたものだといふ想像がつ

ぶものを入れる事になつたが、此れに就ては後に柱の部に記す事にする。

室町時代以降は種々雑多で別に新様式はない。鎌倉時代から礎石の上部柱に接する所に「礎盤」と呼ぶのが最も至當で決して無理はないと思ふ。

室町時代以降は種々雑多で別に新様式はない。鎌倉時代から礎石の上部柱に接する所に「礎盤」と呼ぶのが最も至當で決して無理はないと思ふ。

礎石の形は先づ大體右に記したが、其様式が一通り分ると例へば或る廢寺址へ行つた時、幸に礎石が残つて居れば其様式と附近に散布せる瓦の破片等から創立年代を大體考定し得るのである。

### 第三 敷 石

壇上に石を敷いたのは前に述べたが、建物の内부는飛鳥奈良時代に於ては床を張らないで、壇上と同様に石(瓦又は)を敷いた。法隆寺金堂はセメントで固めてあるから分らないが、夢殿の床には立派に残つて居る、何も敷かない場合は土間のまゝであつたので、板で張りつめる事はなかつた。

併したゞ一つ除外すべきものがある、夫れは法隆寺東院の講堂たる傳法堂で、橘夫人の住宅を移建したものと傳へて居る、此の建物は様式から判斷すると正しく奈良時代後期に屬するが、内部に拭板の床を張り正面に椽を附してある。此椽は可なり粗末なもので巾も左程廣くないから、今のは何度目かの修繕の際巾を狭め材料を悪くしたか、又は無理な想像であるが椽を全然後世に附加したかも知れないとしても、内部の床は當初から板で

張つてあつたと見るのが至當である。橘夫人の住宅であつたといふ傳説から考へて見ても、此の建物が佛堂でなくて住宅建築であつたから床を板張にしたり椽をつけたりしたのであらう、故に床が石(瓦又は)敷か或は土間であるといふのは佛堂の場合をいふので、住宅——といつても上流の——には矢張床は板張であつたのである。

平安時代になると佛堂の床は板張になつたが、石敷の並び行はれて居たのは勿論である、時には建物の前半即ち外陣を高くして板を張り内陣を低くして石を敷き詰めたのもある今日我々は延暦寺の根本中堂及び講堂に於て實例を見る事が出来る。鎌倉時代になつて禪宗伽藍が盛に建てられるやうになつた、其床は常に瓦敷である、此時代には無論板敷石敷も行はれた、以後各時代同斷である。故に飛鳥奈良時代では唐制に倣ひ石敷又は土間であつたが、平安時代に入り板敷もあるやうになり、鎌倉以降は所要に應じて適當なる方法を講じ、遂には板で張つた上に疊を敷く様になつたのである。(大正八年十一月十五日稿)